

会 議 録

会議の名称		令和5年度第2回守谷市地域福祉推進委員会		
開催日時		令和6年1月17日(水) 開会:14時00分 閉会:15時45分		
開催場所		市役所 全員協議会室		
事務局(担当課)		健幸福祉部 社会福祉課		
出席者	委員	清水委員、長谷川委員、森山委員、天内委員、山下委員、横張委員、 小野寺委員、澤田委員、古屋委員、大塚委員、鶴田委員、萩原委員、 斉藤委員、長津委員、佐藤委員 計 15人 (欠席者: 荒川委員、永井委員、染谷委員 計3人)		
	その他	社会福祉協議会:高橋事務局長		
	事務局	稲葉健幸福祉部長、羽田社会福祉課長、滝本健幸長寿課長、 高橋市民協働推進課長、福島生涯学習課長、 松井社会福祉課長補佐、北川係長 計 7人		
公開・非公開 の状況		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数	0人
公開不可の場合 はその理由		守谷市審議会等の会議の公開に関する指針		
会 議 次 第		1 開会 2 あいさつ 3 議事 (1)第3期守谷市地域福祉計画・地域福祉活動計画における人材の確保・ 育成 (2)その他 4 閉会		

確定年月日	会議録署名
令和6年1月30日	委員長 山下 勝博 議事録署名人 天内 健一 横張 克博

1 開 会(事務局)

2 あいさつ(山下委員長)

3 議 事(進行:山下委員長)

(1) 第3期守谷市地域福祉計画・地域福祉活動計画における人材の確保・育成 事務局から説明

- ・ 協働のまちづくり担い手育成事業(市民大学) ……市民協働推進課
- ・ ボランティアの確保・育成、ボランティア活動の支援……社会福祉協議会
- ・ もりやコミュニティ・スクールボランティアバンク ……生涯学習課

<委員からの御意見・御質問>

・ 清水委員

人材確保について検討する場合、地域活動における「リーダー」の育成と、地域活動への「参加者」の確保を分けて考えるべきではないか。
気軽に参画できるボランティアを増やす必要がある。

・ 鶴田委員

協働の担い手育成を目的としている市民大学について、受講生の地域活動への参加に繋がっていないのではないか、という指摘があった。
市民大学の事業を評価する際に、受講生数等の評価だけではなく、どの程度地域活動に繋がったのかという視点からも具体的なデータを取得し、評価を実施すべきではないか。
市民大学の運営側に対しても、そうしたデータを提示し、働きかけた方が良いと思う。

・ 事務局(高橋市民協働推進課長)

担当課(市民協働推進課)においても、そうしたデータの必要性を感じている。
担当課で把握しているデータとしては、市民公益活動の団体数とそれに関わっている人数であり、それについては増加傾向にある。
しかし、それが市民大学の影響で増加しているのか、については把握ができていない。
市民公益活動に登録する際に、市民大学を受講したことがきっかけであるのかどうか、などを確認する取り組みも考えられる。
コロナの影響で市民大学を1年間休校する前までは、市民大学修了時点で、今後地域活動に参加する予定か否かについてアンケート調査を実施していた。アンケート調査が途絶えてしまっていたが、今年度は、アンケート調査を実施したいと考えている。
市民大学の受講生がまちづくり協議会の活動などに参加している様子は見受けられる。

ただ、市民大学の受講とその後の市民活動支援センターによる活動の支援があまり連動していない。その連動を図ることで、“市民大学を受講することで、こうしたことに繋げられる”といった流れを醸成していくことが求められていると思う。

- ・ 鶴田委員

「市民大学受講後に地域活動に参加したいか否か」といった定性的な調査だけではなく、定量的な調査も必要だと思う。市民大学の受講開始時に地域活動をしている人数を把握し、受講後にも定期的に、同じ数値を把握するなどの取組みが必要だと思う。それによって、経過観測ができると思う。

そうした観点から様々な仕掛けを作るように、市から運営側にもう少し働きかけても良いと思う。

- ・ 山下委員

今年、市民大学を受講している。

受講目的について、「地域活動に繋げるため」ではなく、約半数の方が「自分自身の教養を深める」と回答していた。受講開始時に、市民大学の目的等をきちんと明示し、意識づけをするべきだと思う。

- ・ 佐藤委員

7年ほど前に市民大学に参加した。その当時は、授業の中で、「どのようなボランティアであれば参加したいか、自分たちでボランティア活動を作ってみよう」といったものがあつた。それにより、いくつかボランティア活動が生まれたことがあつたので、授業の中でそうしたテーマがあることで、前向きに考える機会になるのではないかなと思う。

「ようこそ守谷」については、市民大学を担っている方も参加されていると思う。例えば、市民大学の受講生に対して、「ようこそ守谷に参加してみませんか」などといったメールの案内を出してみたり、市民大学の授業の一環で、「ようこそ守谷」に実際に携わってもらったりしてみても良いかなと思う。

若い世代が地域活動に参画できないといった課題について、いきなり担い手になるというのは難しいと思うが、まずは様々な取組みを知ってもらい、足を運んでもらうといった視点でコースを用意しても良いかなと思う。

- ・ 横張委員

我々のボランティア団体では、保健センターを事務局として、薬物乱用に関する小・中学校向けの教室を開催している。令和5年度は2つの小学校と2つの中学校、計4校で開催した。教室は、講師と学校側が連携して開催しているが、こうしたものもコミュニティ・スクール

ボランティアバンクに登録しておいた方が良いのかと感じた。

- ・ 山下委員

まずは、リーダーを育成しなければいけないと思う。リーダー的な存在がいれば、そこに多くの人が集まってくると思う。

- ・ 小野寺委員

ボランティアを求めている組織や人数等が一覧になっている資料があれば、「これなら私にもできる」と思う方も出てくると思う。

コミュニティ・スクールの取組みについて、住民と行政が考える「コミュニティ」に多少乖離が生じているのではないかと思う。

- ・ 事務局（福島生涯学習課長）

コミュニティ・スクールの取組みについては、協議の時間が足りなかったと思う。

国が進めているやり方を教科書どおりに実施している部分もある。本来は、地域の特性を見ながら進めていかなければいけない取組みだと思う。

- ・ 澤田委員

市民大学を受講したら楽しそうだな、といった仕掛けがないと興味を持ってもらえないのではないか。もう少し工夫が必要だと思う。

- ・ 山下委員

受講生には様々な受講目的があるので、やはり早い段階で意識付けがあった方が良い。

単に授業を受講して終わりではなく、そこでお互いに様々な話をし、関係性を築くことで、地域活動に参加してみようと思ってくれる方が出てくると思う。

また、各地域に対して市民大学のPRをもう少し実施してほしい。

- ・ 古屋委員

取組評価とは、本来、具体的な課題を洗い出し、それに対する目標（できれば数値目標）を立てた上で、客観的に行うものであるので、評価のやり方を検討すべきだと思う。

人材の確保・育成については10事業掲げられているが、各事業の活動目的自体をこの推進委員会の場で話し合ってみても良いかと思う。

- ・ 天内委員

まちづくり協議会等に携わっている方も高齢化が進んでいる。今は、65歳頃まで就労する

時代であり、地域活動に参加してくださる方は65歳～75歳、80歳の年齢層の方が多い。会社を退職して少し経つと、社会に役立つことがしたいと思うようになる。そうした方への働きかけが足りていないと思うので、講演会等を開催し、意識付けを強化してほしい。また、ボランティアの内容は多岐に渡る。無償ボランティアには限界がある。ボランティア活動に対して何かしら特典を設けるなどの工夫も必要だと思う。

- ・ 長谷川委員

女性団体連絡協議会に所属している。この団体は長い歴史がある団体であるが、若い世代に参加いただけない。市からも参加の呼びかけをしてほしい。

- ・ 事務局（稲葉健幸福社部長）

サロン活動のボランティアの方の高齢化が進んでいたため、試行的に地域に入り、ボランティア活動に取り組んでくれる方を探したことがあった。結果としては、若い世代の方が既存の団体に入るのではなく、新しい団体を作った。親世代と一緒にやるのではなく、同世代の方と一緒にやることを選択した。既存のものを継承するだけではなく、新しいやり方で何かをやってもらうという事も選択肢の一つだと思う。

若い世代については、まずは取組みを知ってもらう、空いた時間だけ参加してもらうという考え方が大切だと思う。

- ・ 山下委員

既存の組織に入るのは非常にハードルが高い。ハードルを下げて、参加してもらえようにならなければいけないがなかなか難しい。その結果として、同じような活動をする違う小集団がいくつも出来上がることがある。一つの大きな組織であればできることも、小集団の集まりではできないこともある。そうした点も課題である。

- ・ 澤田委員

無償ボランティアと有償ボランティアをきちんと区別しなければいけない。

- ・ 斉藤委員

70代向けのボランティア、80代向けのボランティアなど、年齢別に検討してみるのも良いのではないかな。

- ・ 長津委員

障がい児父母の会の会長をしているが、障がい児に対するボランティアは非常に少ない。ボランティアをお願いすることがあるが、ボランティアの方の年齢層が上がっており、お願い

するのが申し訳なくなってしまう。

スポーツを通じて、健常者、障がい者関係なく触れ合えよう、といった社協の取組みがあった。そこに参加していただいた小・中学生が非常によくしてくれた。小・中学生はボランティアという意識ではなく、一緒に遊んでいるという意識であったと思うが、そうした機会により障がい者への意識が少し変わっていくのではないかと思う。ボランティアをしていたく前に、理解者を増やしたいというのが我々の希望なので、こうした機会があったことは有難い。

ボランティアをお願いする際、申し訳ないという気持ちがあるので、ボランティアポイント制度のように、ポイントが付与されると頼みやすい。そのため、ポイントの適用範囲を介護施設だけに限定しないでほしい。

そのほか、守谷市の学校の話になる際に、伊奈特別支援学校のことが触れられないことが多い。伊奈特別支援学校は、守谷市内の学校に通うことができない守谷市の子どもたちが多く通っている。伊奈特別支援学校でもボランティアを募集することが多いが、守谷市の方の参加が非常に少ない。伊奈特別支援学校のボランティアについても、守谷市でももう少し広報してほしい。

- ・ 大塚委員

資料12ページに人材の確保・育成に対する課題をまとめていただいているが、課題を示すだけで終わるのではなく、具体的な取組みを示してほしい。

市には、地域活動に参加する人と一緒に汗をかきながら伴走支援をしてほしい。

市が市内の事例を広める役割をもっと行ってくれれば、それを参考に、各地域で取組みを始めてくれる人が増え、人材確保・育成にも繋がっていくと思う。

地域活動の推進を検討していく際の「市の役割」が明示されないことが多い。“協働”なので、お互いパートナーとして、市民ができること、それに対して市が支援できることを考えなければいけない。

私自身は子ども食堂の関係で、市の方とも関わりがあり、支援してもらったこともある。そうした良い経験がないと、市と関わりが生まれにくく、もったいないと思う。

市には先導役、調整役をお願いしたい。

- ・ 森山委員

市民大学は、1つのコースで10回程度の昼間の授業がある。若い世代にとっては、回数も多く、昼間の出席は難しいと思う。若い世代も参加できる仕掛けをお願いしたい。

資料10ページにコミュニティ・スクールボランティアバンクの活用事例が記載されているが、北守谷地区の記載がなかった。これは、学校側からの需要がないのか、それともボランティアの供給がないのか、どのような状況なのか。

- ・ 事務局（福島生涯学習課長）

基本的には学校側からの要望を受けて、ボランティアバンクの登録とマッチングを行っている。現状としては、北守谷地区の学校からの要望が挙がってきていない状況。

- ・ 森山委員

若い世代のボランティアについて、時間も割けないし、あまり本気度が高くない。

また、日本ではあまりボランティアに対する意識醸成がなされていない。海外では“ボランティアをしてやっと一人前”といった国もある。

人が集まらない根本的な原因も探っていく必要がある。

- ・ 山下委員

いきなりボランティアに参加するというのは難しい。小さい頃からボランティアに対する意識を持ってもらうことが必要だと思う。

- ・ 小野寺委員

自分自身も現役世代のうちはあまり地域活動を意識しなかった。

退職のタイミングでの働きかけと小さい頃からの意識醸成が求められると思う。

自分の地域では、「気楽会」という組織があり、規約もない。自由に活動に参加したり、抜けたりする。子ども会の方も参加してくれており、様々な経験をしてもらっている。

良いと思われる取組みについては、広報等で広く周知してほしい。

- ・ 萩原委員

30年前ほどに市外で介護のボランティアに参加していた。参加することでポイント等をもたらしていた。自分のできる範囲で、人のために何かできるということがとても楽しかった。その際にもらったポイント等はとても貴重なものに思えた。

ボランティア活動の励みになるような工夫をしてほしい。

- ・ 澤田委員

サークル等に参加すると様々な人と顔見知りになり、仲良くなる。そうしたところから、ボランティア活動などに繋がっていく。柔軟に対応していく必要がある。

- ・ 山下委員

本日、委員の皆様から様々な提案をいただいた。それに対する具体的な取組みを検討し、この場でも示していったほしい。

- ・ 事務局（稲葉健幸福祉部長）

地域では様々な取組みを行っているが、そうした社会資源を十分に拾いきれていない。市や社協が地域に出向くことで、社会資源を集め、それを市全体に広めていきたいと思う。

- ・ 山下委員

地域、市民の側も市に対して、実施している取組みを発信していくことが大事。

皆様のご意見を広く聞いていきたいと思うので、今後ともよろしくお願いしたい。

（2）その他

特になし

5 閉会

- ・ 次回は来年度開催の予定。